



SADAHARU HIRANUMA

STAND BY BLUE ~想いでつなぐ物語~/02 中日ドラゴンズ一軍用具担当 平沼 定晴

平沼定晴、その強さ優しさ。

『ありがとう』の言葉が誰よりも似合う男がいる。現役時代を含めると29年目。一途な想いで人生の半分以上をドラゴンズに捧げるのが、一軍用具担当の平沼定晴だ。

「サダさんありがとうございます!」という選手たちからの言葉がめちゃくちゃ嬉しい」と目を細める56歳。1982年ドラフト2位で中日に入団。86年オフには“世紀の大トレード”と言われた落合博満との1対4のトレードでロッテオリオンズ(当時)へ移籍。95年オフに再びトレードで古巣中日に復帰し、98年に西武で現役を引退。翌年から打撃投手として3度目の中日復帰、現在は一軍用具担当を務めている。

用具担当としては18年の経験がある平沼だが、毎年春季キャンプの初日は特別な想いで迎える。「帽子、ユニホーム、ジャンパーなど全てが正しく全員に届いているか。打撃マシンは故障していないか。防球ネットは大丈夫か。2月1日は何年経っても緊張します。うまくいってくれ!と、毎年願っています」

シーズンが始まてもそう。選手たちがユニホームを着て万全の態勢で試合・練習に臨めるか。平沼は常に気を張り、考えを巡らせる。道具の在庫管理、遠征先への荷物の手配、選手から依頼のあった道具の発注など、用具担当の仕事は多岐にわたる。「自分の道具は忘れて、他人(ひと)のものは忘れないように管理していく。選手に道具を忘れさせないように、球団の道具は忘れないように、あれもこれも準備を決して怠らないようにと、ずっと思っています」

気付けば選手たちは息子世代。今の選手たちをどう見ている?という問いに平沼は「僕らのやっていた時代と今は全然違いますね」と答える。「昔は

裏方さんが強くて、その方たちの言うことを聞かないといけなかった時代。説教もあった。今は選手がとても尊重される時代。その代わり、しっかりと主体的に練習しないといけないし、自分自身の管理をしていくという大変さもある。選手とは、ひとりひとりの性格やタイプに応じた接し方をしています」剛胆で“いかつい風貌”にも見える印象とは裏腹に緻密な心配りと温かい洞察。「俺らの時代はこうだった」みたいな話を選手たちにするのは好きじゃない」そんな一言が人柄を表しているが、選手に対して思っていることも、この選手には言っても大丈夫だなと思えば直接ズバッと話すという。ちゃんと目と目を合わせて話すことがとても大切だと思っているのは、『ありがとう』の言葉が一番大好きという話と、人との繋がりや向き合い方という点で突き詰めると同じなのだろう。

そんな平沼が、いま一番伝えたい!と口を衝いた想いがある。「成績に関係なく熱く温かく応援してくれるドラゴンズファン、ましてやこのコロナ禍でもドームに足を運んでくれる皆さんにとても感謝しています。本当に『ありがとう』ですよね。どのように恩返しできるのか考えていく」感謝を伝えられることができが何よりの原動力であり、生き甲斐と語る男の流儀。「自分だけのためになんて、大して力が出ないと僕は思うんです。『誰かのために』、その方が力は出る。自分はそうだし、それは選手たちも同じなのでは?と思う。チームが苦しい時にも応援してくれるファンのためにも、選手たちにはもっと感情を前に出して、本来の性格そのままに勝負に挑んで欲しいですね。ワンプレイ・ワンプレイも表現だし、感情豊かに野球をするのも表現。ヒリヒリするような真剣勝負。行け～!と見ている側が声が出て、うまくいかなかかった時だって、悔しさを思いっきり

表してもいいと僕は思う。選手の懸命な想いは必ずファンの皆さんに伝わる、そう思います。だってファンの皆さんは懸命に応援してくれますよね?応援してくれてる皆さんを魅了してこそ『ありがとう』になるし、ドラゴンズの選手たちならそれができると思っています」



もし今、自分が現役投手だったらドラゴンズのどの打者と対戦してみたい?そんな問い合わせに、一瞬真顔になったあと優しく微笑んで「洋平だね」そう答えた平沼。大島への攻め方も頭に描いていたようだった。そのことを伝え聞いた大島は「いつでも挑戦待ってます!」そう笑って返してくれた。この時の大島の表情で、平沼定晴という男がどれほどチーム内で愛されているのかが判る。

人の顔・表情というのは、時に雄弁で、ある意味で何よりも嘘がない。愛情深く選手たちを見守りながら、裏方としての役割に精を尽くすことでチームを支え、共に戦っている男の顔。平沼の顔からは、強さと優しさは真逆なんかじゃない、そう教えられるようだ。

「これからも色々なカタチで野球界に貢献、恩返ししたい」そんな想い・夢を抱く平沼。すべてのまん中にでっかい『ありがとう』があるからだろう。チーム一丸となって、ファンに最高の『ありがとう』を届けられるような選手たちの躍動を願いながら、裏方として今日も一途にドラゴンズを想い続ける。